服飾文化共同研究報告 2010
共同研究番号 22001

近代日本モダニズム芸術とファッションについての研究
――1910 年代－1930 年代を中心に
Modernism and Fashion in Japan 1910s -1930s

五十殿 利治[*1+], 滝沢 恭司[*2+], 鈴木 貴宇[*3+], 喜多 孝臣[*4+], 江口 みなみ[*5+]
Toshiharu Omuka[*1+], Kyoji Takizawa[*2+], Takane Suzuki[*3+], Takaomi Kita[*4+], Minami Eguchi[*5+]

*1 筑波大学大学院人間総合科学研究科 茨城県つくば市天王台 1−1−1
Graduate School of Comprehensive Human Sciences, 1-1-1 Tennodai,
Tsukuba, Ibaraki, Japan
*2 町田市立国際版画美術館
Machida City Museum of Graphic Arts
3* 早稲田大学オープン教育センター
Open Education Center, Waseda University
*4 早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程
Doctoral Program, Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University
*5 筑波大学大学院人間総合科学研究科博士後期課程
Doctoral Program, Graduate School of Comprehensive Sciences, University of Tsukbua
[+]服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化女子大学
Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture,
Bunka Fashion Research Institute, Bunka Women's University

Abstract： The present study is to examine the image of "Artist" in modern Japan, an image which was different from traditional literati and imported from West just like the Art itself. Late Meiji and early Taisho period saw a surge of modernism in art and literature in Japan and special attention is paid to the significance of artists' fashion including "nude". Major modernists in the 1920s and the 1930s such as Ryusei Kishida, Kaita Murayama, Kyojiro Hagiwara, Tomoyoshi Murayama and so on were multi-talented and transcended traditional boundaries of genres of arts and some of them attracted public attention for their fashion and thus were widely publicized as a fashion leader. These no doubt contributed to the formation of the general image of "Artist". Our purpose is to investigate modern fashion in terms of general art(s) history, taking into consideration western original models and its transformations in modern Japan, its reception of general public and so on.

研究目的

「美術」という概念が「書画」や「彫物」とは異なる近代の所産であったように、「美術家」のイメージも「文人」とは異なるものとして近代に成立したものであり、「美術」と分かちがたく、広く社会に流布している。本研究は明治末・大正初頭以後の日本におけるモダニズム芸術、とりわけ美術と文学を中心にして、「裸

＊1） Omuka@geijutsu.tsukuba.ac.jp

体」を含む芸術家のファッションが帯びた芸術的意義を検討することを目的としている。とくに昭和戦前期までの時代に着目するのは、明治末・大正初頭から、岸田劉生、村山槐多から萩原恭次郎、村山知義までモダニズムの洗礼を受けた作家にはマルチな才能をジャンルを横断して発揮するものが少なくなかったからである。「ファッション・リーダー」としてジャーナリズムによって喧伝される場合さえあった。つまり、その芸術活動のスタイルが一般の「芸術家像」の形成のみならず、時代の突端に立つ者（つまりアヴァンギャルド）というイメージの形成に大きく関与したと考えられるのである。

研究活動と成果

本年度は 4 回の研究会を開催した。平成 22 年 7 月 23 日筑波大学において、研究計画採択より前であるが、研究計画の細部や各自が主としてカバーする研究領域についての打合せを行った。ついで、11 月 3 日、文化ファッション研究機構において、共同研究員全員と事務局と、研究体制、研究予算の執行計画等について打合せた。つぎに平成 23 年 1 月 15 日、筑波大学において、トビー・スレイド Toby Slade 氏（東京大学特任講師）とともに研究会を開催した。氏は The Aesthetic Conceptualisation of Japanese Fashion と題した英文ペーパーを用意し、話題提供を行った。氏の問題設定は、日本の近代ファッションの概念規定に関わるものであり、本研究にとっては背骨に相当する問題である。近代ファッションがなんであるかを抜きにして、「ファッション・リーダー」は論じられない。氏の主張を要約するならば、近代日本のファッションとは頑固なくらいに特異なものでありつづけたというものである。なぜならそれは「美的」だからということである。こうした「美的」な社会的存在としてのファッションは、本研究にとってはきわめて示唆的である。

ついで、2 月 5 日-6 日、共同研究の一環として、高島屋史料館、神戸ファッション美術館、兵庫県立美術館、芦屋市立美術博物館に調査を行った。高島屋史料館では百貨店と美術家の関係について、神戸ファッション美術館においてはファッションにおけるマネキンの重要性について、兵庫県立美術館においては森村泰昌作品において著名な人物になり切り、歴史的シーンを演じる作品から身体表現としてファッションについて示唆を受けた。芦屋市立美術博物館において、神戸ファッション造形大学青木美保子氏による画家小出楢重のファッションへの関心とその背景についての講演を聴講した。

さらに 2 月 19 日には、筑波大学において、宮内淳子氏（帝塚山学院大学教授）とともに研究会を開催した。宮内氏の話題提供は「宇野千代『色ざんげ』をファッションから読む」というものであり、画家東郷青児と一時同棲した宇野千代をめぐり、東郷をモデルとした小説「色ざんげ」におけるファッションを、色彩感覚から割り出した上で、宇野が長年にわたり（1936-1944、1946-1959）編集したファッション雑誌『スタイル』の誌面を検討するものであった。文学者と美術家の両者に着目するのは、本研究の主旨に合致するものであり、時代的にも合致する例として、研究会で活発な議論がなされた。

その他の研究成果として、五十殿利治が韓国近現代美術史学会・韓国国立現代美術館共催により行われた国際シンポジウム「Avant-garde in Asia」（平成 22 年 10 月 9 日、韓国国立中央博物館講堂）において発表した英文によるペーパー「The Avant-garde and Fashion Strategy in 1920s Japan: Not Living the “Artist” But Making a New Life」を挙げることができる[1]。本発表は五十殿が主として 1920 年代における美術家を例にして、単なる美術家像の更新にとどまらない、新生活を提示する人間としての美術家の活動について論じたものである。

*1 なお、本論文はプロシーディングスだけでなく、Journal of Korean Modern and Contemporary Art History, vol. 21, 2010, pp. 187-196, 197-206 にそれぞれ韓英二ヵ国語により再掲された。